

和泉式部の代作歌

森 田 兼 吉

和泉式部日記に次のような一節がある。

かくて晦日がたにぞ御文ある。日ごろのおぼつかなきなど言ひて、言「あやしきことなれど、日ごろもの言ひつる人なむ遠く行くなるを、あはれと言ひつべからむことなむ一つ言はむと思ふに、それよりの給ふことのみなむきはおぼゆるを、一つのたまへ」とあり、あなしたり顔と思へど、「さはえ聞こゆまじ」と聞こえむも、いとさかしければ、女「のたまはせたることはいかでか」とばかりにて、

女惜しまるる涙にかけはとまらなむ心も知らず秋は行くともまめやかにほかたはらいたきことにもはべるかな」とて、端に、「さて、

女君をおきていづち行くらむわれだにも憂き世の中にしひてこそふれ

とあれば、言「思ふやうなりと聞こえむも、見知り顔なり。あまりぞおしはかり過ぐいたまふ、憂き世の中とはべるは。

和泉式部の代作歌

宮うち捨てて旅行く人はさもあらばあれまたなきものと君し思はば
ありぬべくなむ」とのたまへり。

(日本古典文学全集P一一七〜八)

晦日とは九月の晦日である。長保五年(一〇〇三)四月に端を發した和泉式部と帥宮敦道親王との恋にも、はや五ヶ月が経過した頃。しかし、二人の仲らいにはなかなか進展が見られない。この五ヶ月の間に二人が実際に逢つたのはわずかに五度で、しかも七月下旬に逢つてからはすでに二ヶ月も逢わずの時が続いている。ほかにこの間に四度ほど和泉を訪ねた帥宮が逢えずに帰つたということがある、この記事のすぐ前にも、九月十日余りの有明の月に目を覺ました帥宮が「あはれ、この月は見るらむかし」と和泉を訪うたものの、和泉側ではみな寝入っていたため門を開けるのがおそくなり空しく帰ってしまったという出来事が語られている。その暁起きに手習のように書いて奉った和泉の文と、その文中の和歌に答えた帥の宮の五首の歌との、いわゆる五首贈答の経緯は、日記中有数の美しい描写としても知られている。それに続く晦日がたである。「日ごろ

もの言ひつる人」は三条西家本を底本としての本文だが、応永本系統・寛元本系統の諸本はすべて「しのびで物いひつる人」(字形は応永奥書本による)であり、諸本の系統論から考えれば、その方が原型であろう。帥宮が忍んで語らっていた女性が遠くへ行く。その人に贈る歌の代作を和泉に依頼して来たことになる。「あはれと言ひつべからむことなむ一ツ言はむと思ふ」という宮のことは、すぐ後の「それよりのたまふことのみなむさはおぼゆる」という、和泉の歌才をたたえ、和泉の歌によってのみ感動するみずからを示すことによって和泉への恋情の深さをもうったえる、微妙な文を導く前程になつてゐるのだが、それはそれとしても、相手の女性も、思わずああと感動の声をあげるような歌を贈りたい、もつといえ、旅行く人の足も心も留めたいほどの、そんな人だといつてゐることになる。

和泉式部日記では、帥宮はしばしば和泉の周辺に出没する影の男達の存在に嫉妬し、苦惱してゐる。後に帥宮は和泉を自邸東三条院南院に迎え入れることになるが、それにはこうした影の男達から和泉を断ち切りたいという思いが大きく働いてゐる。ところがおもしろいことに、これまで帥宮に影の女の存在は描かれていなかった。どんなに帥宮の訪れや文が長く途絶えても、自分への愛情の薄さは思つても、宮の女性関係に思いを馳せることはなかった。一度宮の疑いの歌、

松山に波高しとは見てしかど今日のながめはただならぬかな
に對して、

君をこそ末の松とは聞きわたれひとしなみにはたれか越ゆべき

という歌で応じたことはあつたが、これはあくまでも歌のかけひきで、前後にそれと呼応する描写はない。帥宮の北の方についてさても「例の人の仲のやうにこそおはしまさねど」とあつて、愛情の面では自分と競いあえる存在とは考えていない。そんな中で初めて登場して来た女の影である。日記にはこれ以後も帥宮の女性関係をうかがわせる叙述は出て来ないから、ここは和泉式部の前にただ一度現れた帥宮をめぐる女の影だということになる。それも、帥宮の言動の背後にある女の存在を和泉が敏感にも感じ取つたといふのではなく、宮の方から、代作依頼という形で和泉の眼前に投げかけて来たのである。

恋人への歌の代作を和泉に依頼して来る。——あつかましき・無神經さ・貴族らしいおおらかさ。まずはそんな評語が浮かんで来るであろう。しかし、帥宮はなぜ和泉に歌の代作を求めたのであろうか。あなたの歌だけが私を感動させる、だから……と一応理由は述べられてはゐるのだが、これは充分な理由になるだろうか。日記を一読すればわかるように帥宮は豊かな歌の才藻を有していた。和泉と互角に歌を詠み交わしているし、歌の詠作にも積極的で、おそらくは歌に對する自負もあつたのであろう。帥宮が真心をこめて作れば、その思いの深さは充分に相手に伝わり、感動を呼ぶような歌は作れるはずである。その女の存在をあらわに示してまでして和泉に代作を請う必要性があるであらうか。こう考えて来ると、和泉に歌の代作を求めて来たのは、歌が必要だからではなく、和泉に自己と深いかわりのある女の影を見せつけるためであつたと解さざるを得ない。

えなくなつて来る。何度も女の周囲の男の影をみせつけられ、つい先日にも空しく帰る苦しさを味わつたばかりの帥宮が、和泉の心をげしくゆきぶり、嫉妬させようとしたのだと言つてよいであろう。

であるからこそ、帥宮のこの代作依頼の文は実に細かく神經の行き届いたものとなつてゐる。「あやしきことなれど」とまず弁解の辞から始まるこの文は、「しのびでもの言ひつる人」「あはれと言ひつべからむことなむ一つ言はむと思ふ」と、その女への愛慕の情の深さを示しながら、と同時にその女は遠く行く人でもあるといふ。ちつちつと和泉の前に姿を現わしながら、⁽³⁾もはや二度と二人の間に介在しては来そうもない存在。鈴木一雄氏のことばを借りれば「はじめから京を去るべく、宮から離れるべく約束させられているはかない、影々に過ぎない」のである。それに対して今は和泉こそが私の感動する歌の作れる人だといふ。和泉が現在の恋人であれば、影の女は確實に過去に位置づけられる存在なのである。そんな存在であるからこそ初めて、帥宮は女の存在を和泉の前は提示し、代作を依頼しえたのだといえるであろう。しかし、それにしてもなお、女への歌を和泉の代作歌で充てようとする帥宮の態度には疑問が残る。この時代、男が恋の歌の代作を女に依頼することとは、けつしてめづらしいことではない。後で述べるように、和泉式部の場合はそうした例がことに多い。ただ一般的に見て、恋の歌の代作は恋愛の初期の段階で行われるのが例である。初めて女に贈る歌・なかなか返事をくれない女への歌・後朝の歌(女のもとへ行く日の約束が出来てから、あらかじめ作つてもらつておくのか)といったところは代作歌ですませるのだが、一旦二人の仲が確立してし

まえば、もう何か特殊な事情でもない限り代作歌の要請は必要がなくなつて来る。もはや代作歌の入り込む余地はないといつてよいであろう。帥宮と旅行く女の場合、二人の間には何度も何度も歌の贈答があつたであろう。そして、今何か事情があつて女は遠くへ去ろうとしてゐる。二人の愛情がたと今今は冷えきつてしまつていたとしても、これまでの愛情を考えれば、別れを惜しむ歌——二人の交情の最後のものとなるかもしれない歌を、新しい恋人の和泉式部に代作させたものとすませるとしたら、その女に対してきわめて礼を失し、侮辱することになる。非礼の程度は代作を頼んだ和泉へのそれとは比較にならないのである。このように考えれば、この影の女が本当に実在する人なのかどうか、きわめて疑わしいと言わざるをえない。和泉の心をゆきぶり、二人の關係に一石を投じて新たな展開を呼び起こすために帥宮が造り上げた幻の女のように思えるのである。帥宮のこの代作歌の依頼は、屈曲した形ではあるが、和泉への一種の愛の表現だと見るべきであろう。

帥宮の代作依頼に対する和泉の最初の反応は「あなしたり顔」という思いであつた。全訳王朝文学叢書で「得意顔に御代作するのめいやだし」と訳され、玉井幸助氏の和泉式部日記新註で「御代作など、あまりに得意顔なこと」と解されたのが一時は通説化していたが、はやく竹野長次氏の⁽⁴⁾和泉式部日記新釈に「まア誇り顔に惚気話をなざるものだ」と訳されているような、帥宮の行為、態度についての感想の語として把握するのが正しいであろう。鈴木一雄氏的全訳和泉式部日記に解釈についての詳しい分析がある。「まあ得意そんなお顔をして」(全集)という訳あたりが無難であろう。嫉妬と

不快感のないまぜになった心情の表白と見るのが普通であろうが、帥宮の恋の技巧を、その女の实在性の希薄さを見抜いてしまった上での評語とも取れそうである。これまで小稿は帥宮の文のことはばを主な足がかりとして分析して来たのだが、それが帥宮の實際の文の通りである保証は実はない。和泉式部のもとに書簡類が保存されていて、それによりかなり忠実に書かれているのかもしれない。和泉の記憶による再現かもしれない。ただとにかく、和泉の手を経ており、和泉の手が加わっていることは否めない。和泉が帥宮の文をこのように把握していたと見るのが正しいのだが、このあたりの描写には帥宮の心中まで見ずかしている女の目があるように私には思える。しかし、どちらにしたところで、こうした反応のし方にもかかわらず、和泉は、

惜しまるる涙にかけはとまらなむ心も知らず秋は行くとも
という、実にしみじみとした歌を贈っている。帥宮の気持になりきって行く人を愛惜すると同時に、その愛に確信の持てない帥宮への思いをもあわせ歌った絶唱となっている。またそれに加えて、これは直接帥宮に、

君をおきていつち行くらむわれだにも憂き世の中にしひてこそ
ふれ

と歌いかけ、「われだにも」という中に、去って行くその人よりもはかない己が身、帥宮にのみ頼らざるをえない己が身を強調している。となれば、帥宮も、代作依頼などもともと和泉の気をひく以外の何物でもないのだから、

うち捨てて旅行く人はさきもあらばあれまたなきものと君し思は

ば

と応じ、このエピソードは二人の間に何ら不快なわだかまりを残すことなく終わりを告げている。むしろそれぞれ心をゆきさぶり、愛を確認させたことになり、二人の仲を、一步前進させたことなるであろう。

二

和泉式部の歌集を見ると、男性の恋の歌の代作を和泉がしばしば依頼されていることが目につく。和泉式部の正集統集からあわせて十八首の代作歌を私は見出した。和泉式部日記のさきの例——これは正集では代作歌かどうかからない——と、赤染衛門集に見える二首を加えて二十一首の代作歌が見出されるが、そのうち十五首は男性の恋歌の代作である。女性の歌の代作歌をも含めて、そのすべてを次に示す。引用は岩波文庫本の和泉式部歌集による。漢数字はその歌番号である。

A をとこの、人のもとにやるにかはりて

1 おぼめくなたれともなくてよひよひに夢にみえけん我ぞその人
(一一一五)

をとこの、女のもとにやるのとて、かはりて

2 不尽のねのけぶりたえなんととふべきかたなき恋を人に知らせ
ん
(一一二一)

七月晦日、女のもとに始めてやるのとて、よませし

3 花すすきほめかすより白露をむすばんとのみおもほゆるかな
(一一二七)

月のいとあかき夜、初めて女にやるとて、男のよませし
4人しれぬ心のうちも見えぬらんかばかりてらす月のひかりに

(二二八二)

B 十二月、つとめてのうたとて、をとこのよませし

うちはへて涙にしきしかたしきの袖の水ぞけふはとけたる(四五四)。
一二六三に重出。はへて||わびて、しきし||しみし、けふ||今朝)

これも人にかはりて

6昨日までなき(に)なげきけん今朝のまに恋こそはいと苦しかりけれ(一二六四)

C 二月ばかりに、返事せぬ女に、をとこのやるとてよませし

7あとをだに草のはつかに見てしがなむすぶばかりの程ならずとも(九一一)

かへりごとさらにせぬ女にやるとて、よませし

8たけからぬ涙のかかる我が袖にながるる水といはせてしがな

(二二三〇)

D みそぎのまたの日、女のもとへやるとて、をとこのよませし

9今日をわがあふひともがなみな人のかざすその日はうれしげもなし(二二〇一)

八日、男の、女の許にやるとてよませし

10いむとてぞきのふはかけずなりにしを今日ひこぼしの心地こそすれ(二二八四)

をとこの、女のがりいきて、えあはでかへりきて、つとめ

てやるとてよませし

11ここながら恋ひはしぬともそこまではいかずぞかねてあるべかりける(二二八五)

つくしなりける女、哀なるけりをとに「かならずあはん」とたのめて、こと人かたらひたりとききて、をとこのいひやる

12たのむとてたのみがたきはこの世かな齋垣の松に浪はこゆとも

(七六四)

E

ただにかたらふをとこのもとより、「女のがりやらんうた」とこひたる、やるとて

13かたらへばなぐさむ事もある物を忘れやしなんこひのまぎれに

(一七四) 一四七二に重出)

月いとあかき夜、女のもとよりをとこのもとに、うたよみておこせたりければ、「いかむ」とていでたつほどに、あめふりければ、つとめてやるに

14来てふかと思ひておもひたしまにさしくもりにし月のかよひて(七五三)

F

陸奥といふ所よりきたるをとこのまつ人のもとへいかで、ほかよりかへるを聞きて、たびの衣などしてやるとて、よませし

15旅衣きてもかばかりつらけれどたちかへり来とおもふべきかな遠き所に年来ありけるをとこの、ちかうきても、ことにみえぬに、やらむとて、人のよませし

16よそなりしおなじときはの心にてたえずや今もまつのけぶりは

(一三六七)
つねにたえまがちなるをとこ、おとづれぬにやるとて、人
のよませし

17 このたびはかぎりとみるに音づればつきせぬ物は涙なりけり

(一三七六)

男のものゝ妻あたり、いみじうはらだつと聞くに、箏を
やるとて、今の人のよませし

18 かはらじや竹のふるねはひと夜だにこれにとまれぬふしはあり

やは
(一四三八)

またのちに(前の歌の詞書によれば赤染が息子拳周に代つ
て大江雅致の女に)

出でてこしみちのまにまに花薄まねく宿のみかへりみぞせし

(私家集大成中古Ⅱ所収 赤染衛門集Ⅰ 一九五)

かへし、あねのいづみしきぶ

19 とまるべき心ならねば花すすきただ秋行くとまた、(か)せ(て)

ぞみし(同一九六)

其人、齋院長官かふきみといふ人にあひぬと聞きて、高ち
かにかはりてやりし

ちはやぶる神のかみとやおもふらん人はひととまきかぬところ

に(同二〇九)

かへし、あねのいづみしきぶ

20 そのかみの人をも人とおもはねばさしはなれたるしめのさかき

ば(同二一〇)

Aの四首は初めて女に贈る歌、Bは、つとめて——後朝の歌、C

はなかなか返し文をよさない女への歌。Dはそれらにくくれぬ
歌をまとめたのだが、9 10 11は、男と女の仲らいの初期の歌で、男
の意のままには女がまだ逢おうとはしない頃、男が逢う瀬を求めて
贈る歌である。12は心変りをした女への歌で、どうやら逢うことも
なく終わる二人の仲らしい。結局ここまではすべて、恋愛関係がま
だ深まっていない頃の男の歌だということになる。Eの二首は、代
作を依頼して来た男と女の仲らいの程は不明だが、詞書の筆者の筆
はその男の描写に費されていて、和泉と男との関わりが知られる例
である。Fは女が男に贈る歌の代作歌である。妹の歌の代作は別に
すれば、他の四首はすべて、男の心に秋風が立つなどとして、女が危
機に立たされたときの、つまり歌説話などによく出て来るように、
優れた歌が効果をあげることを期待される。そんな場面での歌であ
った。19 20のように、赤染衛門の息子拳周と和泉式部の妹の贈答歌
で、その実は赤染と和泉のそれぞれの代作歌がやり取りされ、受け
取る方も贈られた歌が代作歌であることは先刻承知の上という興味
深い例もあるが、何といっても最も注目されるのは、男性の恋の歌
の代作の多さで、これは他に例を見ない和泉の代作歌の特色だと言
えるであろう。私家集大成中古Ⅰの道綱母のところから、中古Ⅱの
康資王母のところまでの、和泉式部と同時代か活躍時期のそう遠く
ない女流歌人について、代作歌を調べてみたが、その結果を数字の
上だけで示すと次の表のようになる。私家集大成に数本が掲げられ
ている場合は、Iとして示された本を主とし、他本により補った。
他に作品のある場合はそれも参照した。

人名	代歌数	肉親の代作		他人の代作		不明	題詠
		男	女	男	女		
和泉式部	一八	〇	〇	一四	四	〇	〇
含日記他	二一	〇	〇	一五	四	〇	〇
道綱母	一三	〇	〇	〇	二	〇	一
合日記推定	四二	〇	〇	(a) 〇	二	〇	一
清少納言	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
含枕草子	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
赤染衛門	六一	〇	二四	〇	一	〇	一
四条宮主殿	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇
伊勢大輔	一二	〇	〇	三	一	〇	〇
相模	五	〇	〇	四	〇	〇	〇
四条宮下野	八	〇	〇	〇	〇	〇	〇
弁乳母	三	〇	〇	〇	四	〇	〇
康資王母	一	〇	〇	〇	二	〇	一

誰の歌の代作歌かによって項を分けたが、歌合に出すなどのための代作歌は、すべて題詠の項に入れた。

もっともどれが代作歌なのか、認定にはいろいろ問題がある。道綱母の場合、蜻蛉日記下巻の、道綱の大和だつ人や八橋あたりの女への歌はみな母親の代作と推定したが、兼家の兵部卿宮への歌の中にも彼女の代作がありそうである。また傳大納言殿母上集に

ほととぎすなくに

和泉式部の代作歌

宮こ人ねてまつらめやほととぎすいまぞやまべをなきてすぎぬ
る (三八)

は、同本にある「拾遺」という注記や、蜻蛉日記巻末歌集のこの歌に付された「この歌は、寛和二年歌合にあり」（日本古典文学全集）という注記を参照すれば、寛和二年六月十日内裏歌合の十巻本に「少将道綱」の名で詠まれたもので、同歌合廿巻本には「道綱卿母」（以上平安朝歌合大成による）とあり、拾遺集夏一〇二番に「寛和二年内裏哥合に、右大将道綱母」（古典文庫所収の定家本による）とあり、この歌合に参加する道綱のための代作と推定したが、傳大納言母上集の字面からだけではこの間の事情はまったくわからない。傳大納言殿母上集の末に「うたあはせにうのはな」ではじまる十首は、その内五首が正暦四年五月五日の東宮居貞親王帯刀陣歌合の歌と一致し、道綱のための代作である可能性が大きいと思うのだが、同歌合の伝本には作者名（出席者名）を欠き、彼女自身の出席も考えられないことはなく、確認できない。また赤染衛門についても、真鍋瀬子氏が流布本をもとに四十三首と計算されているのに対して、私は他本をも参照したものの六十一首をかぞえている。解釈や調査のし方によって、代作歌の認定には動きがあるといわねばならず、それぞれの家集の読みの足りない私の抜き出しにも問題はあろうが、おおよその傾向はわかるであろう。

それぞれの代作歌にその歌人の特色の出ていることは一応言えるであろう。赤染衛門の場合、息子や娘のための贈答歌が多く、それは子どもたちの結婚生活が長く続く中でのさまざま場面で作られている。道綱母も道綱のための歌をさまざま場面で作っている。

この二人の場合は代作を依頼されたというのではなく、自分から積極的にその役を買って出ているのである。歌に対する自負と母親としての存在の重さが強く感じられる。和泉の男の恋の歌の代作の多さ、あるいは代作歌の中に占める位置の大きさはやはり群を抜いている。表に示した他の九人の歌人の肉親ではない男性の贈歌の代作は合わせても和泉のそれに及ばないし、恋の歌の代作と限定すると、赤染三、伊勢大輔三、相模四（件数では二）、弁乳母一の十一首にすぎない。さすがに恋愛歌人和泉らしい事実で、和泉の人となりやその文学について考える際これら代作歌への目くばりも、きわめて大切なものではあるまいか。

三

和泉式部日記中の例とは違って、和泉式部集の詞書は簡略で、和泉とどのような間柄の人がどのような事情で代作を頼み、和泉がどんな反応を見せたかはつきりしない。比較的事情のわかるものについてまず見てみたい。Eの二首である。まず14。

月の明るい夜、女のもとから男に歌が贈られて来た。それに応えて女のもとを訪おうとすると、あいにくの雨。行くのを止めて、翌朝男は女に歌を贈る。「来いというのかと思つて行こうとしたのだが、雨雲に月も隠れ道も閉ざされてしまつて……」というのだが、これが和泉の代作と読める。雨で行けなくなつたこんないきさつを、男が細かに和泉に伝えて来て、弁解の歌の代作を請うたとはどう考えても不自然である。この男は和泉と一緒に暮らしていた男で、女から歌が来て男が行こうとしていたのも、雨で止めたのも、みんな直

接見聞していたという条件の中でこの歌が詠作されたと考えるべきであろう。とすれば最初の夫橋道貞あたりがその男の有力候補となろうか。道貞と和泉との離別の原因が、和泉と為尊親王との恋愛事件にあるというよりも、むしろ道貞の女性関係によるところが多いのではないかという指摘も最近はなされている。男が出かけなかったのも、雨というよりも和泉との間に何かがあったからで、この歌も頼まれて作つたというのではなく、和泉の方からおしつけた歌であるかもしれない。歌も、和泉式部にしては珍しく、このような場合のものとしてはそつけない。行かなかつた理由が「さしくもりにし月のかよひぢ」というのでは、誠意を疑われ、弁解にはなるまい。和泉自身に次のような歌がある。

「よべは雨のいたうふりしかば、いかずなりにし」と云ひたる人に

人ならばいふべき物をまつほどに雨ふるとはさはるものかは
(一三三八)

ともかく、すらつと代作歌が詠まれたのではなく、複雑な愛憎の葛藤を背景にして出来たものであることは確かである。

13は、このとき代作歌が作られたことは確かなので代作歌として数えたのだが、この歌自体は代作歌ではなく、代作歌に添えて男に贈られた歌である。その男は「ただにかたらふをとこ」だという。「ただにかたらふをとこ」という表現は、和泉式部集には他に一四一一に見え、七八三には「ただにあるをとこ」という表現がある。「和泉式部集全釈 続集篇」で小松登美氏は五〇九（岩波文庫本では一四一一）の余説で「ただにかたらふ」関係について考察され、

「(前略) 枕草子に見える清少と行成、清少と斉信のやうな、兄妹よりはもつと相手を異性として感じるつきあひであらう」といわれる。他にも、

ときどきふみなどおこするをこの、ひさしうおとせぬに
うきよりも忘れがたきはつらからで、だに、たえにし中にぞあり
ける (一一九三)

のよな歌もあり、「ただに」で表現されるよな仲の男達にも、
和泉の思いはきわめて深い。七八三の、

いたづらに物をぞおもふまつほどのいのちもしらずけふやけふ
やと

など、切迫した思ひがあり、詞書がなければ「ただにあるを」とこへ
の歌だなどとはとうてい考えられない。小松登美氏は「ただにか
たらふ」関係では、「男が他の女に恋をしたやうな時には、正集一
七三(森田注 岩波文庫本一七四)のやうに嫉妬ならぬ嫉妬を見せ
るのが、女の半ばエチケツトで半ば本音であらう」といわれるが、
このよな時の和泉の歌には、ため息をもらすよな、時にはおの
が身に向つてつぶやきかけるよな、深い響きがある。エチケツト
を越えて、こうした折に心がゆきぶられ、男への思ひが思はずあら
わになつたよな歌が詠まれるのである。

代作歌と直接かわりはないが、和泉と何らかの関わりをもつ男
性の、他の女性へ示す関心に、和泉の心が揺れ騒ぎ、思わず口ずさ
まれる例を見ておこう。

雨のいたうふる日、或男今始めてかたらふ女の事ほめるた
るをききて

和泉式部の代作歌

みるまにおもひやのきの玉水をもらさぬ中と誰かしるらん
(一一五五・七四七に重出)

あるやむごとなき人の、ゆゑありときこしめすむすめのも
とに、梅の花つかはすをみて

花のかに心はしめりをりてみなそのひとえだにみこそあらねど
(一一六五)

をこの、女のもとにやるふみをみれば「あはれあはれ」
とかきたり

あはれあはれ哀れ哀れとあはれあはれあはれいかなる人をいふ
らん (一一八七)

おなじをとこ、六月に、「わがそでひめや」と云ふ歌の心
ばへを、女のがり云ひやりたるをみて

わがたま(め)はかけてもいはで夏衣なげのあせにもぬれずや
あるらん(一一八八・九二九に重出。初句わがためは、下句な
げのあはれもいはずやあらん)

これらの男と和泉との関わりの深さの程度はわからないが、一
五三では見るままに私への思ひが退くのではないか(「のき」は軒に
退きをかける)と嘆じ、一二六五では、「そのひとえだにみこそあ
らねど」——その一枝に実はないし、わが身も手折られる可能性は
ないのだけれど——というところに、梅の花を贈られる女に対する
羨望の情が表現されている。一二八七・一二八八は同一の男への歌
で、これにも羨望の思ひは深い。これらをしも嫉妬というのならば、
和泉の嫉妬は、相手に向つて激しく噴出するというのではなく、わ
が身の憂さ、つらさを思うという形で、自己の内部に沈んで行く

いう形をとっている。そして嫉妬以上に、その男性への思いが、相手が思わず息をのむほどあらわになっている点が目につく。他の女性との関わりを見せつけられることによって、和泉の心が激しくゆさぶられ、心の奥にひそんでいたその人への思いを揺り起こし、増幅し、むき出しにしてしまう。そしてその思いは歌となり、おそらくはその男の耳にはいり、目に触れるのである。二人の意図はどうであれ、これらの歌とこれらの歌を詠ませた出来事とは、必らずや和泉とその男との仲を一步進ませたことであろう。

これらとは違った反応を和泉が示したものととして、次のような歌にも注目すべきであろう。

をとこのもとに、女の返事のふたつみつあるを見てやる

はしばしをとふみかくふみふみみればただ身のうきにわたすなりけり
(一一三五)

しりたる男の、女懸想するに、えあふまじき気色を見て、
いみじうなげきて、思ひやみなむとおもふに、やまねばわぶるに、

かくながらやむべきなかとおもふにもあやなく我ぞ心ぐるしき
(一四五七)

一四五七では成就しえぬ恋に嘆く男に同情している和泉がある。理性で同情しているのではない。「あやなく我ぞ心ぐるしき」——自分で自分の心苦しさが、あやなく……すじのとおらぬわけのわからぬものと思えてならないほど、切実に、かつ唐突にこみあげて来る同情なのである。

一一三五で、男の許に女の返事の文が二つ三つあるのを見てとい

うと、この男はどうも和泉と一緒に暮らしているように思える。小松登美氏は「住む仲」夫婦——と見てよいと思ふ」といわれる(全釈続集篇)。福井照之氏は道貞と見ておられる。「身のうき」の「うき」には勿論「憂き」に沼地の意の「溼」をかけているのだが、「身の憂き」とはだれの身の憂きなのか。和泉とすれば(全釈続集篇)「わたしがどんなに不幸な女か、本当によく判りますわ」となるうし、相手の女の「身の憂き」で、和泉がそれに同情しているとする考えもある。前者はかなり苦しい解で、成立しがたいだろう。私は後者でもなく、和泉と暮らしている男の「身の憂き」であると考える。「うき」の縁で使われている語なのであるが「わたす」に男の積極性を見るのと、今初めて納得したことを表わす「けり」に込められた和泉の思いを重視するからである。あちらからの文の端々を見て、あなたのお気持ちがよくわかりました。御自分の身をたまたまなく憂きもの——つらく悲しいものと思っていらいっしやるからこそ、すさびごとの恋だったのですね。——およそこんな意味になるうか。和泉式部日記で、和泉との恋を侍従の乳母からさとされた帥宮が、

いづちか行かむ。つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ。ことごとしう人は言ふべきにもあらず。(P九八)

といっていることばと全く同じ認識の表現であり、男の心情をよく理解して、というより男の立場になりきった認識であり歌である。苦干の皮肉はこめられているかもしれず、こんな歌をもらった男はかえって困ってしまうだろうが、このような理解と寛容の心の働

四

和泉式部の歌集に見られる男性の恋の歌の代作歌の内、Dに分けた13・14を除いては、代作を依頼して来た男と和泉との関わりの方方はよくわからない。しかし、和泉の周辺の男達で、日頃から和泉に文を贈つたり、歌の贈答などもしていた、取り巻きといつてもよい者が多いであろうことは想像がつく。和泉式部日記に、

かくいふほどに、七月になりぬ。七日、すぎごとどもする人のもとより、たなばたひこぼしということどもあまたあれど、目も立たず。
(P一〇七)

というような文があつて、ここに見えるような、季節の折節ごとに文や歌を贈つて来る男達であり、宮仕え後なら、気軽に和泉に声をかけ、局にも立ち寄るといった男達である。となると、和泉式部日記の帥宮の場合とは事情は異なるが、和泉に代作を依頼することによって、時には架空の恋人をこしらえ上げることで、和泉の気を引き、その心をゆさぶろうとした場合もあつたのではないかと思われる。Iの

おほめくなたれともなくてよひよひに夢にみえけん我ぞその人など、初めて女に贈る歌としては大胆で、おしつけがまし。その人のことを強く思っていると魂があくがれ、その人の夢の中に現われるという俗信をふまえた歌で、それほどあなたのことを思いつめているといふわけだが、これは相手の女が毎晩のように男の夢を見ているという前程がなければ成立しえないし、男も、こんな歌を作つてもらつたところで、もてあましてしまうだろう。この歌は、男

和泉式部の代作歌

の代作依頼の真の意図を読みとつた和泉の、「あなしたり顔」と思つての戯作ではなかつたらうか。

和泉式部になぜ男性の恋の歌の代作が多いのか、その理由については阿部俊子氏⁽¹⁾は「女に関心をもつことの多い男が、彼女のまわりになりに親しい関係で多く居たということ、彼女と男達の関係の中には、そのような代詠をたのむことのできるようなあまえを持ちうる余裕のあるつきあい方があり得たのではないかと想像したくなる」と述べておられる。阿部氏は他にも「男がもつても心惹かれる女の歌であつたので、相手の女に深い感銘をあたえる歌をおくりたいという時に、誰をおいても彼女にたのみたいと思つた」とか「何か大らかな衆生済度にも通う寛恕の雰囲気」とかをも挙げられておられ、どのみち幾つもの理由が重なつての代詠歌の多さなのだろうが、贈る相手をだしにしたり創作したりして和泉に接触し、その心をゆさぶろうとする恋愛の技巧的なものも、数を増やす理由の一つにはなっているだろう。「おほめくな」の他には、これと指摘しうる例はない。男の意図が見えたとしても、素直に男の要請に応じてみせる和泉式部の姿を想像することは容易である。そしてそのような場合に増幅され、あらわにされる男への思いが、男のつけめであり、それは同時に、世間から「浮かれ女」として和泉が受け取られる一つの原因ともなるのであろう。

代作を依頼して来た男の他の女への思いや関わりが、真剣なものであつたり、真剣なものとして映つた場合、和泉の心の揺れは大きく歎きも深かつたらう。その思いは歌集の詞書に示されることはない。示されていないからといって、これらの代作歌が、「お願いし

ます」「はい。どうぞ」といったふうに簡単に出来上がったということ、これまで見てきた例からも、考えることができない。しかし、かなりの心理的葛藤はあつても、和泉は代作の要請に慮えている。それも、男の立場になりきつての歌が多い。男と女の関わりの詳細を踏まえずに作っているのであろうから、平板になりがちで、秀歌といえるほどのものはない。戯歌的な「おぼめくな」の方がむしろ精彩を放っている。とはいえ、初めての歌は初めての歌として、つとめての歌はつとめての歌として、実にふさわしいものとなっているのである。

和泉式部の代作歌と題しながら、代作歌の一首一首には触れられず、和泉式部日記中の代作歌と和泉式部集中の代作歌、それに和泉と何らかの関わりをもつ男達が他の女に関心を示したときの彼女の反応をあらわす歌の、これらを重ね合わせる試みだけに終わってしまった。一首一首考えることも大切だが、このようにまとめ、重ね合わせるの考察も、和泉式部の人となりや文学について考える際に重要だと思つたからでもある。自分で自分の心の姿を見て歌う、いわゆる「自己客体視」の能力をもつ和泉式部像は、寺田透氏や清水文雄氏¹³によって指摘され、我々に親しいものとなっている。それにつながるものだが、他の女にはとてもそうは望めないような場合でも男の立場になって見たり考えたりのできる和泉式部像をもさらに追求して、和泉式部日記の叙述のし方との間に脈絡をつける試みをも展望として記して、いずれ再論することとしたい。

注1

日本古典文学全集は三条西家本を底本としているため「九月二十日あまりばかりの有明の月」となっているが、他本のように「十よ日」の有明の月でなければならぬ。森田「和泉式部日記論攷」第一章の四・第三章の二参照。

森田 注1所引書 第一章の二 参照。

3 『全講和泉式部日記』

私家集大成によるが、かなづかいを正し、送りがなを補い、濁点を施し、校訂を加えた。

5 蜻蛉日記には、兼家が遠くへ行く人のために「歌を一餌袋入れて給へ」と乞い、道綱母も応じている記事があるが、歌数

不明(天延元年五月条)

6 家集から見た作家の像——歌人赤染衛門の性格——(国語と国文学昭和32・7)

7 私家集大成で歌番号を示しておく。赤染衛門1三七一・四七五・五九二。伊勢大輔1一・二八・一二五。相模1一三七・

一三八・一六三・一六四。弁乳母四五。

8 藤岡忠美氏 家集から見た和泉式部伝——「和泉式部日記」

まで——(鑑賞日本古典文学「王朝日記」所収)ほか。

9 「和泉式部」考——その生涯と和歌——(山口大学教育学部研究論叢第一部昭和49)

10 岩瀬法雲氏 和泉式部の人間観(園田学園女子大学論文集八

昭和48・12)

11 鑑賞日本の古典「蜻蛉日記・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記」

12 「和泉式部」(日本詩人選)ほか。

13 「王朝女流文学史」ほか。